ミニ大通だより

2007年11月

楽園の眺め

いつも、この欄に登場してもらっているのは、ホテハマ・タカシの木版画。山口県の小高い丘にある彼のアトリエを、先日訪ねてきました。木の床から高い天井まで、机、イーゼル、絵の具、キャンバス、筆、スケッチブック、額ぶち、玩具…いくら散らかしても叱られない子ども部屋、みたい。

アトリエの窓は、海の方に向かって開けています。木々の頭越しに田んぼが見えました。刈り取りを待つたわわな稲穂、風に揺らぐ白いススキ、四角い畦道に並ぶ真っ赤な彼岸花。その畦道を、列をなしてランドセルの子どもたちが下校していきます。そのうち走り出す子、しゃがんで地面を掘る子。黄色い帽子が、不規則な分子のようにくっついたり離れたり。やがて田園風景から消えて行きました。

すべてが夕日を浴びて黄金色に染まる様子を、長い間ぼうっと眺めました。まるで小さな楽園。

札幌に戻ると、店から眺めるミニ大通は、ナナカマドも楓も紅葉真っ盛り。私の楽園には、もうすぐ冬、到来。

イル・ポスティーノ
大谷　薫
北4西14 ☎272・7277

ミニ大通だより

2007年12月

ぺこり、また来年

さてさて、最後の月となりました。早いわ～。お礼状、書いてへん、植木片づけてへん、歯医者さん行ってへん、へんへんへん。へん＝ない。すなわち、やり残したこといっぱい。反省まみれの年の暮れ、今年の「いいこと」考えてみましょう。

一つめは、お茶のおけいこ。移り気な私がゆっくり、でも着実に進んでいる…つもり。いくつになっても成長できる。この実感がウレシイのです。寛大な先生と先輩諸姉に、お礼のぺこり。

二つめは、すずきもも著『さっぽろおさんぽ日和』に店を紹介していただいたこと。七月の出版以来、たいへん人気の本です。近在の方はもちろん、駅で買って、という観光客の方も何人もみえました。昨日までの知らない者同士を結びつけてしまう、小さな本の大きな力。ももさんに、脱帽のぺこり。

そして一年間、倦かず眺めたミニ大通。近所にお勤めの方々、昼休みのお掃除、どうもありがとうございます。感謝のぺこり。

来年も、「いいこと」ありますよう。神様に、お願いのぺこり！

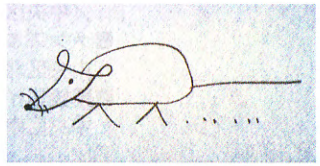
イル・ポスティーノ
大谷　薫
北4西14 ☎272・7277

ミニ大通だより

2008年1月

新年の使者

それは、去年の暮れでした。私の誕生日でもありました。そろそろ店じまいという時、ひとりの青年がふらっと入ってみえました。濃いめのコーヒーを注文し、静かに本を読み、閉店時刻きっかりに、すっと立ってお勘定をすませ、戸口に向かわれました。見送りながら、「寒いですね。ご近所ですか？」と背中越しに声をかけると、その彼はふり向いて、「どんぐり、食べました」と答えるのです。秋に拾っておいたどんぐりを見せ、「こんなのですか」と聞くと、「あ、それそれ。灰汁を取るといけますよ。パンに入れてもおいしい。」そう言って、ミニ大通の暗がりに消えてゆきました。



…手のひらのどんぐりを転がしてみました…いたずらっぽく光っていた小さな目、印象の薄い口。ヒゲなんてなかった、と思うけど…まさか。

「どんぐり、食べました」。ネズミ年、殻を破って面白くしたいと思いました。どちらさまも、よい一年をお過ごしください。

イル・ポスティーノ
大谷　薫
北4西14 ☎272・7277

ミニ大通だより

2008年2月

スケートリンク

白い雪、どっさり。毛糸の似合う季節です。スキー、ボード、スノウシュー、ワカサギ釣り、犬ぞり…アウトドア派、おつかれさま。こちら室内担当を自認していたら、聞き捨てならないニュースが入りました。雪まつりの間、大通にスケートリンクができるとな！都会のリンクといえば、『ライ麦畑』や、しゃれた映画でおなじみ、ニューヨークのロックフェラーセンター。大通のも、あんな感じ？これは行ってみないと。

学長秘書をしていた頃、ボス宛にニューヨーク在住の名誉教授からクリスマスカードが届きました。「スケートのレッスンで、キャメル・スピンができるようになりました」とあり、脇にはステップ順の番号と矢印や「ｔｈａｎｋ」と書いた自作イラストも。マフラーを巻いてクルクル回る、初老の紳士を思い、私もそんな風に年をとりたい、そう憧れたものでした。元気で歳を重ねていたら、いつかミニ大通にもミニ・スケートリンクが現れて、ツィーと滑ったり、できるかしらん。

イル・ポスティーノ
大谷　薫
北4西14 ☎272・7277

ミニ大通だより

2008年3月

WANTED

昨年あたりから、よくものを無くします。ピアスとお揃いだったペンダント、ｇｇのサングラス、いちばん気に入っていた青い傘、計量スプーン小さじ用。みんな、ふいに。

先月のある日、もう一つ、なくしてしまいました。いや、もう一匹、いなくなった、というか。それは、黒い犬です。店内の、犬に関する本の上、が彼の定位置でした。二〇〇一年の開店からいつも一緒。全長十五センチ、やせ型、横向き、鉄製。気がつくといなくなっていました。

いま、犬のいた場所には、WANTEDと書いた似顔絵が貼ってあります。西部劇のお尋ね者ポスター風。われながらよく描けました。似すぎで思い出して悲しい、と猫が言います。猫は、入り口に座っています。濃い灰色の地に青いダイヤ柄。伏し目。陶製。たぶんインドネシア生まれ。一日の終わり、この二匹に「お疲れさん」と、声をかけるのが私の日課でした。

ミニ大通にさまよい出たんかなぁ。黒犬を見かけた方は早く帰れとお伝えください。

イル・ポスティーノ
大谷　薫
北4西14 ☎272・7277